

## 海外学生派遣事業 実績報告書

所属：文化科学研究科日本文学研究専攻

氏名：黄昱

海外派遣先国名：中国

海外派遣期間：2015年6月12日～6月25日

### ●海外派遣前の準備

今回の海外派遣は主に短期間の現地調査を行うため、現地では所属の機関がなく、指導の先生と相談して計画を立て、現地に赴いた。博士論文では『徒然草』と漢籍・漢訳の関係の問題を取り扱うが、日本の異種『蒙求』という中国唐代の李澣の『蒙求』に倣い、江戸時代に『徒然草』など日本の古典作品の説話を漢文に訳した書物についてずっと調査を続けている。今回はそれとの比較を行うため、中国で刊行された異種『蒙求』などの蒙学資料、および『徒然草』の中国語訳本を調査・収集し、中国の中でも昔は教育事業が発達して、今でも伝統と遺跡などが比較的に残っている福建省の福州と泉州に二週間滞在した。

派遣の前は、中国で刊行された異種『蒙求』についての研究論文を整理し、入手できるものを通読した。また、派遣先の福州と泉州の図書館と博物館、昔は孔子を祭りながら学校の役割も兼ねた両市の文廟などの教育機関の情報を収集した。

### ●海外派遣中の勉学・研究

派遣期間の二週間は国文研で指導いただいた陳先生と相談して、6月12日～17日の6日間は泉州で、18日～24日の7日間は福州で調査を行った。泉州では、まず泉州博物館と泉州海外交通史博物館で基本情報を収集した。南宋時代に、朱子学の創始者である朱熹が泉州・福州をはじめ、福建省に任官する時、官学・私学を大いに発展させた。書院という地方政府が支援し、個人が運営するいわゆる一種の私塾が盛んに創設されるようになった。例えば、朱熹自身が創立し、或いは講学した九日山書院や小山叢竹書院、考亭書院、温陵書院などをはじめ、近代以前、泉州市（周囲の県を含む）には60以上の有名な書院が存在していた。現在、泉州市の文廟（当時の府学で、孔子廟）に泉州の古代教育の体系や有名な文化人を紹介する展示があり、古代泉州の盛んな教育状況が窺われる。

今回は時間の関係で、これら書院の中でも著名な欧陽書院、一峰書院、小山叢竹書院、考亭書院、温陵書院、濂江書院の遺跡を見学した。欧陽書院は朱熹が亡くなった以降の明代に作られたものであるが、唐代の泉州の有名な文化人である欧陽詹が勉強した石室の跡にその子孫が創設した書院である。温陵書院、小山叢竹書院、石井書院と並べて、泉州の四大書院のひとつである。今は昔の建築がすでになくなり、石碑だけが残っている。一峰書

院も明代の学者で泉州に任官し、講学した羅倫を記念し、創設したものであるが、今は泉州第一高等学校にその遺跡を標記する扁額が残っているだけである。小山叢竹書院は北宋に創立されたもので、朱熹が講学した場所として有名であったが、今は温陵養老院になっている。考亭書院は泉州市安溪県にあったが、今は安溪実験小学校になっている。温陵書院は朱熹が創立したものとして有名であったが、初建の地は現在の泉州市第一病院附近で、その後の明代にまた東街附近に移転したこともあり、遺跡には何も残っていないのが現状である。濂江書院は福州にあるが、唐代にすでに書院がある所で、朱熹がここで講学したことがある。南宋の末期に、当時の皇帝が元軍（モンゴル）に追い詰められ、南に逃げる途中にここを離宮として使ったこともあり、今は泰山宮と濂江書院と、比較的古い建物（清代頃か）が残っており、その近くに林浦小学校が建てられている。これらの書院は当時に文化人が集まって講学し、多数の優秀な学生を科挙試験に送り出したが、現在にはその当時の面影がほとんど残っておらず、或いは石碑ぐらいの標記が残っているだけであったり、或いは介護施設や学校になっていたり、跡形もなく消滅したところも少なくない。

そのほかに、明代の思想家である李卓吾の故居や、清末から中華民国時代の教育家・文化人である弘一法師の記念館なども見学し、古代から近代まで泉州の教育、特に私学の盛況を実際に確かめた。

福州には、前述した濂江書院のほかに、村や氏族毎に科挙試験で進士に合格し、特に高官に任官された人々の名前を古い時代から全部挙げて、牌坊に記載したり、家廟に祭ったりする所が少なからず見られる。今回は、林浦にある林尚書家廟や、台江区にある陳文龍尚書廟を見学した。また、福州の鼓山にある有名な寺院の浦泉寺に所蔵されている大蔵経の版木を見学し、唐宋以来形成された坊巷がよく残っている三坊七巷に蒙学堂や、皇帝から「六子科甲」（一家に兄弟六人が進士に合格した）の扁額を賜った福州の豪族である陳氏の故居を回った。この陳氏の六人の中には、末代皇帝溥儀の師である陳宝琛が含まれており、彼は後に、近代的学校を創立し、福州の教育を大いに発展させた人物でもある。そのほか、福州図書館、福州大学図書館と福州師範大学図書館を見学したが、私学の遺跡がたくさん残っているわりに、残っている蒙学の書物は少なかった。時間の関係もあり、ゆっくり見ることはできなかった。また、福州市博物館と福建省博物館も見学した。

今回の滞在のもうひとつの目的は、『徒然草』の中国語訳を収集することであるが、書店を回って近代以降に出版された五種類の訳本を見付けて購入した。2002年出版の李均洋訳『方丈記・徒然草』が一番早いものであるが、そのほかの四種類の訳本はすべて2011年以降に集中して出版されている。近年、中国で日本の古典文学の翻訳が盛んになっていることを物語っている。

## ●海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

今回はかなりきびしいスケジュールを組んだので、二週間の派遣期間は全部現地調査に時間を当てた。毎日現地を回って当地の住民も知らなかったりする場所を捜すのが大変であ

るが、普段はずっと図書館に座っている私にとって、運動不足の解消になってくれたことを喜んでいる。書物でしか読んだことのない所を実際に目で確かめることの大切さを実感できた。

#### ●海外派遣費用について

中国は日本に比べて、物価はやすいはずであるが、最近は円安のこともあり、中国国内の物価高騰もあり、宿泊代や交通費などは思ったより高かった。食費はわりと安く抑えられたところが助かった。

#### ●海外派遣先での語学状況

日常会話は中国語で問題なかったが、福建省の方言は標準語とだいぶ違う。当地のお年寄りには方言しか話せない方が多い。私は福建省の方言が話せないので、道を聞いたり、当地の事情を聞いたりする時には困ったこともある。

#### ●海外派遣先で困ったこと

語学状況でも述べたように、中国人の私にとって語学が問題になるとは、現地に行くまでは全然思わなかった。現地調査する場所は地図に載っておらず、遺跡も残っていない所もあるので、現地の住民に、特にお年寄りに話を聞く時、言葉が通じないことは時々ある。

#### ●海外派遣を希望する後輩へアドバイス

事前の情報収集は本当に大事なことである。現地調査の経験が全然足りない私のことかもしれないが、事前に情報を調べたつもりでも、実際に行ってみると、調べた地名が変わったりして道が見つからないとか、事前に手続きしないと入れないとか、トラブルは少なくない。調査する場所の情報をできる限り収集し、無理のない計画を立てることが重要であろう。また、日本文学の研究で、このような現地調査を行うことはほかの分野に比べて多くないが、今回の調査を通して、自分の足で歩いて、目で確かめることの大切さを身をもって実感できた。現地調査を通して、当地の状況を自分で確かめ、伝統や風習を体験できるのみでなく、書物だけでは見いだせない新しい視点に出会う可能性もあり、これからはこのような研究方法も積極的に利用する必要があると感じた。

最後に、このような機会を与えてくださった総研大の関係者の皆様、ご指導をいただいた国文研の陳先生、及び調査中にお世話になった方々に厚くお礼申し上げます。

●写真



李卓吾の故居



弘一法師記念館



濂江書院



福州三坊七巷の蒙學堂



林浦の進士牌坊



林浦的林尚書家廟



泉州文廟の孔子像



泉州文廟の広場



福州鼓山浦泉寺の版本